

祝福にあずかる

(ルツ記4・13〜17)

一、モアブに移り住んだ一家

ルツ記の舞台となった時代は（ルツ1・1a）さばきつかさが治めていたころです。イスラエルのベツレヘムに、ある家族がいました。夫の名はエリメレク、妻の名はナオミ、息子の名はマフロンとキルヨンです。時に、この地にききんがあり、一家はモアブに移りました。これから先は行間を読むこととなりますが、夫のエリメレクはモアブに移った後、早死にをしていることからして病弱であったと思われる。息子のマフロンとキルヨンも父親に似てか、病弱だった可能性が高いです。そういうこともあってか、一家はききんを乗り切るために、モアブに移り住んだのかも知れません。ですが、エリメレクは死んでしまいました。二人の息子マフロンとキルヨンはモアブの女を妻に迎えました。妻の名はオルパ、もうひとりの名はルツでした。それから約十年の間、モアブに住みましたが、二人の息子マフロンとキルヨンも、息子を残さないまま死んでしまいました。子供ができないほど二人の息子が弱かったのかも知れません。こればかりは仕方ないことです。時にナオミは、イスラエルの地

のききんが終わったと聞き、帰ろうと決意しました。ナオミは思ったはずで「自分たちの試みは失敗に終わった」と。「病弱な夫と息子たちを思い、ふるさとを離れて異教の地モアブに移り住み、食糧の難は逃れたけれども、夫と息子たちが死んでしまった。これ以上、自分たちの不幸を嫁たちには負わせられない」と考え、オルパとルツに、実家に帰るように言いました。二人は「いいえ、私たちは、あなたの民のところへあなたといっしょに帰ります」と泣いて言いました。嫁たちはナオミに説得され、オルパは実家に帰りました。しかしルツは帰ろうとしません。「あなたの民は私の民、あなたの神は私の神です。あなたの死なれる所で私は死に、そこに葬られたいのです」と食いが下がりません。ルツはモアブ人でありながら、イスラエルの神主を信じていたのでありましょう。こうしてナオミとルツは旅を続けて、ついにベツレヘムに着きました。すると、町中が二人のことでもよめき、「ナオミさんではありませんか」と声をかけました。ナオミは語りました。「全能者が私をひどい目に遭わせたのです」と。ですが、神の見えざる手が、ここから見えるようになります。

二、ベツレヘムに戻って

二人は生活の糧を得なければなりません。イスラエルの律法には落

ち穂拾いの規定があります。ルツは食糧を得るために畑に出て行きました。そうしますとそこは、たまたまナオミの亡き夫エリメレクの一族でボアズが所有する畑でした。ボアズはたいへんな人格者でした。こうして、ルツは知らない人の畑で嫌な目に遭わされることなく、食糧を集めることができました。

時にナオミは、ボアズがルツに好意を持っていると察知し、ルツを幸せにしよう、あることを試みました。それは、大麦をふるい分ける日に、その日は夜遅くまで時間がかかり、ボアズは家に帰らず、食事をすませて酒を飲んだら麦束のところまで横になるはずだから、それを見とどけ、夜になったらボアズの衣の裾で自分の身を覆って横になりなさい、というものでした。はたして、ルツはナオミが語ったとおりにしました。夜中になって、寒気のためにボアズが目覚めると、ひとりの女が足もとに寝ているではありませんか。「あなたはだれか」と言うと、「私はあなたのはしためルツです。あなたのおおいを広げて、このはしためをおおってください。あなたは買い戻しの権利のある親類ですから」と答えました。こうして、ボアズはルツに好意を持ち、またルツを何とか助けようと決意します。それを知ったナオミは語りました。「娘よ。このことがどうおさまるかわかるまで待つていなさい。あの方は、きょう、そのこ

とを決めてしまわなければ、落ち着かないでしようから」と。

その後のことです。4章13節です。

（こうしてボアズはルツをめぐり、彼女は彼の妻となった。）とあります。ルツはみごもり、男の子を産みました。その子の名はオベデです。名を付けたのは近所の女たちでした。そのオベデですが、17節に次のようにあります。（オベデはダビデの父エツサイの父である。）と。すなわち、かのダビデ王の祖父オベデは、ボアズとルツの息子であったと、ルツ記は知らせています。

三、私たちへの適用

私たちには、選べない領域と選べる領域の二つがあります。選べない領域として、いつ、どこで、だれの下に生まれたかがあります。自分の体質が弱かった、強かったもそうです。選べる領域とは、例えば生まれた場所から移動することです。外国に行くこともできます。現代なら結婚相手を選ぶこともできます。生涯独り身で過ごす選択肢もあります。そして、イエス・キリストを信じて、三位一体なる神を受け入れてお従いするという自由があります。信じないこともできます。それは一人ひとりに委ねられた領域です。そのような自由を念頭に置いて、皆さまがたにお勧めします。

神の祝福にあずかってください！